



実践報告 在ミャンマー日本国大使館附属 ヤンゴン日本人学校

～ミャンマーからまなぶ～

釧路市立鳥取西小学校

教諭 葛西敏之

1、ミャンマーの概要

①国の概要

アジア最後のフロンティアと称される「ミャンマー」。正式名称は、ミャンマー連邦共和国です。東南アジアのインドシナ半島西部に位置する共和制国家です。独立を果たした、1948年から1989年までの国名は「ビルマ連邦」でしたが、天安門事件を境に現国名に変更されています。



南西はベンガル湾、南はアンダマン海に面しています。南東はタイ、東はラオス、北東と北は中国、北西はインド、西はバングラデシュと国境を接します。多民族国家で、人口の約7割をビルマ族が占め、他に、カレン族、カチン族、カヤー族、ラカイン族、チン族、モン族、ヤカイン族、シャン族、北東部に中国系のコーカン族などの少数民族がいる。7割を占めるビルマ族が用いる。ビルマ語が公用語として用いられているが、地方に行くと通じない場合もあります。

ミャンマーは、全人口の約90%が仏教徒で、いたるところに仏塔（パゴダ）が建てられています。仏教に次いで勢力のある宗教は、キリスト教（約5%）、イスラム教（約4%）です。ミャンマーをはじめ、スリランカ・タイ・カンボジア・ラオスにみられる仏教は、上座部仏教と呼ばれています。日本にもたらされた仏教は、大乘仏教ですので、同じ仏教ですが、上座部仏教は大乘仏教に比べて戒律が厳しく、修行のあり方などに違いがあります。男子の仏教徒は、一生のうちに少なくとも一度は僧の生活をするのが望まれ、実行されています。男の子が7歳～10歳くらいになると、親は子どもを僧院に預け、僧の生活を経験させるようです。1週間から3ヶ月の修行の後、再び元の生活に戻ります。ミャンマー人の仏教徒は、「仏・法・僧」を心から崇敬し、家庭にあっては両親を、学校にあっては先生を敬う習慣をもっています。このように、仏教はミャンマーの人々の生活と深く結びつき、人々の日常の行動や考え方にまで深く影響を与えています。



キリスト教は、主にカレン族・カチン族・チン族などの山岳民族の間で深く信仰されています。また、インド系ミャンマー人の間では、イスラム教やヒンズー教を信仰する人も多く、ヤンゴン市内にもたくさんのイスラム教寺院やヒンズー教寺院があります。

1988年以降は、市場開放政策が推進され、民間事業者による農産品の輸出入の自由化や、外国投資の受け入れ促進などの措置がとられました。1988年10月、それまでの経済面での鎖国政策を改めて民間貿易ができるようになりました。民主化により拡大の兆しが見え、1990年後半から第一次ミャンマー投資ブームが起きました。しかし、その後欧米による経済制裁で再び経済が停滞しました。

2011年、ティンセイン大統領のもとで民主化が加速され、現在第二次ミャンマー投資ブームが到来し現在に至っています。そして、2015年総選挙が行われ、アウンサンスーチー氏が党首を務めるNLDが圧勝。第一党となり、軍事政権から政権を移譲されることとなります。しかし、2008年に制定された憲法に基づいて、アウンサンスーチー氏は、大統領とはならず、国家最高顧問に就任。さらに憲法にも基づいて設置されている国会でも、上院にあたる民族代表院、下院にあたる人民代表院も議員定数の4分の1は、国軍司令官により指名される（民族代表院：224人。うち56人が軍司令官による指名枠。人民代表院：440人。うち110人が軍司令官による指名枠。）こととなっており、これによって、新政権も軍との関係をうまく構築させながら政権を運営しなくてはならないのが実情となっています。

②ヤンゴン（旧首都）の概要

ミャンマーの旧首都で、ヤンゴン管区の州都であるヤンゴン（旧名称はラングーン）は、国内最大都市であり、エーヤワディー川のデルタ地帯に位置しています。人口は736万人（不確定）、総面積576平方キロメートルのまちです。ここには、約2000人ほどの日本人が生活しています。

季節は、次の3シーズンに分けることができます。

☆ | 暑季 | 2月下旬～5月中旬

最高気温の平均40℃前後・最低気温25℃前後

☆ | 雨季 | 5月下旬～10月中旬

最高気温の平均30℃前後・最低気温22℃前後

☆ | 乾季 | 10月下旬～2月中旬

最高気温の平均30℃前後・最低気温15℃前後



月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年	
最高気温記録* C(°F)	37.9 (100)	38.3 (100.9)	39.4 (102.9)	41.1 (106)	40.6 (105.1)	36.7 (88.1)	30.9 (88)	30.9 (88)	34.4 (93.9)	35.0 (95)	35.0 (95)	35.6 (96.1)	41.1 (106)	
平均最高気温* C(°F)	32.2 (90)	34.5 (94.1)	36.0 (96.8)	37.0 (98.6)	38.4 (101.1)	39.2 (102.5)	39.7 (103.5)	39.6 (103.3)	38.4 (101.1)	35.5 (95.9)	33.7 (92.7)	31.5 (89.6)	32.3 (90.1)	
日平均気温* C(°F)	25.1 (77.2)	26.9 (80.4)	28.8 (83.8)	30.7 (87.3)	32.2 (90.0)	33.4 (92.1)	34.2 (93.6)	34.9 (94.8)	34.1 (93.4)	32.2 (90.0)	29.9 (85.8)	27.2 (81)	25.3 (77.5)	27.5 (81.5)
平均最低気温* C(°F)	17.9 (64.2)	19.3 (66.7)	21.6 (70.9)	24.2 (75.7)	25.0 (77)	24.5 (76.1)	24.1 (75.4)	24.1 (75.4)	24.2 (75.6)	24.2 (75.6)	22.4 (72.3)	19.0 (66.2)	22.6 (72.7)	
最低気温記録* C(°F)	12.8 (55)	13.3 (55.9)	16.1 (61)	20.0 (68)	20.6 (69.1)	21.7 (71.1)	21.1 (70)	20.0 (68)	22.2 (72)	21.7 (71.1)	18.1 (64.6)	12.8 (55)	12.8 (55)	

赴任時期が4月上旬なので、1年で一番暑い時期に赴任することになりました。ただ、学校の職員室や教室、自宅や車の中、商業施設内はエアコンが完備していますので快適に過ごすことができました。ただ、電力不足により、1日に数回ある停電、不定期の計画停電などがあり不便な状態が続いています。従ってコンドミニアム等では発電機を完備しています。

2、ヤンゴン日本人学校の概要

①ヤンゴン日本人学校は、昭和37年（1962年）、多くの日本人が集まり、「日本人の子どもにもきちんと学習をさせる場所をつくろう。」という意見があがり、ある企業の住宅(たく)の一部屋を借りて、補習授業が始まりました。しかし、教員数が足りず、毎日通学することができたのは、4年生以上の子どもたちだけだったようです。3年生以下は、インターナショナルスクールに通いながら、週に1、2回だけ「ラ



ングーン日本人補習校」に通っていたそうです。

2年間の補習校の後、昭和39年（1964年）6月3日、世界で2番目の日本人学校がビルマに設置されることとなります。その後、昭和47年（1972年）4月に、学校名が「ラングーン日本人学校」になりました。1989年から、国名が「ビルマ」から「ミャンマー」に変わり、首都の名前も「ラングーン」から「ヤンゴン」に変更になったため、同時に学校名も「ラングーン日本人学校」から、現在の「ヤンゴン日本人学校」になっています。そして、平成2年（1990年）から現在の場所に移転されています。



在ミャンマー大使館附属ヤンゴン日本人学校

設置者：ヤンゴン日本人会

運営主体：ヤンゴン日本人学校運営委員会

※「大使館附属」となっているのは、現地の法律では「外国人」および「外国企業」などは不動産を取得、または現地法人を設立することができないため、大使館を通じてミャンマー政府より土地を借用しているためです。

平成28年7月現在

	幼稚部				小学部							中学部				小・中計	総計
	年少	年中	年長	計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	1年	2年	3年	計		
男子	3	11	6	20	11	10	17	13	6	8	65	11	3	3	17	82	102
女子	3	4	5	12	9	4	10	9	9	5	46	4	6	1	11	57	69
計	6	15	11	32	20	14	27	22	15	13	111	15	9	4	38	139	171

平成28年度以前の児童生徒数の推移

年度	小	中	合計	年度	小	中	合計	年度	小	中	合計
昭和39年	12	0	12	平成元年	8	4	12	26年	86	17	103
40年	13	3	16	2年	10	3	13	27年	107	20	127
41年	9	2	11	3年	15	1	16				
42年	6	0	6	4年	17	1	18				
43年	10	2	12	5年	19	0	19				
44年	11	0	11	6年	21	2	23				
45年	15	0	15	7年	28	6	34				
46年	14	0	14	8年	24	8	32				
47年	11	2	13	9年	27	9	36				
48年	6	0	6	10年	39	12	51				
49年	7	0	7	11年	35	9	44				
50年	11	3	14	12年	37	8	45				
51年	11	4	15	13年	30	3	33				
52年	11	2	13	14年	40	4	44				
53年	11	3	14	15年	39	8	47				
54年	17	3	20	16年	42	7	49				
55年	21	3	24	17年	33	9	42				
56年	26	5	31	18年	36	10	46				
57年	26	5	31	19年	25	10	35				
58年	23	3	26	20年	30	3	33				
59年	24	6	30	21年	38	2	40				
60年	28	5	33	22年	35	10	45				
61年	21	5	26	23年	33	11	44				
62年	27	5	32	24年	43	14	57				
63年	19	3	22	25年	69	18	87				

幼稚部 小学部 中学部 を併置し教育活動を行っています。また、その特性から、幼小中の連携を授業の中で行う、また小学校1年生（一部）から教科担任制としています。教職員みんなで子ども1

たちを育てるという意識で行っています。

②施設の課題

平成 26 年（50 周年の節目の年）に、児童数増加を見込み、2 階建ての新校舎が落成されました。この新校舎 1 階には、4 つの通常教室（40 名学級）と特別教室、2 階には体育館としても使用できる講堂があります。しかし、急激な児童数が見込まれる中、教室不足のため今年度は幼稚部（年少）の募集を停止、平成 31 年度に新たな校舎建設に向けて、計画を進行している状況にあります。

	年度	小	中	計	前年比
2011	23年	33	11	44	97.8
2012	24年	43	14	57	129.5
3013	25年	69	18	87	152.6
2014	26年	86	17	103	118.4
2015	27年	107	20	127	123.3
2016	28年	111	38	171	134.6
2019	31年度	250	85	335	131.7

③特色ある教育活動

○日本人として……

本校に学ぶ子どもたちは、生活言語がミャンマー語であったり、日本での生活経験が少なかったりする子が珍しくありません。多様な生活背景をもつ子どもたちに、日本人としての資質を養い、日本語力を高めることは本校の教育課題の一つです。そのため、「朝読書」や「1分間スピーチ」に取り組んでいます。2月に行われる「弁論の会」は、ミャンマーで考えたことや自分の夢などをテーマに、児童生徒がスピーチする伝統行事です。（27年度より、小学部6年～中学部3年生までで実施）。



○国際人として……

ヤンゴンには、現地校、インターナショナルスクール、フレンチスクールなど各国の教育施設があり、多くの子どもたちが学んでいます。これらの子どもたちとの交流活動は、子どもの世界観を広げる上で貴重な体験となります。本校では、文化・スポーツ交流を中心に「大切にしよう 小さな出会い」を合言葉にした国際理解教育を推進しています。その代表的なものが、本校最大の行事「チルドレンズフェスティバル」です。各国の子どもたちによるステージパフォーマンスと日本人学校児童・生徒による日本の伝統文化紹介が行われます。また、隣接している聴覚障害児のための現地校「マリーチャップマン校」などの児童生徒を招待して「サッカー大会」を行っています。



○社会人として……

進路指導・キャリア教育、現地理解学習の一環として、社会体験を大切にしています。現地の事業所（工場等）の見学や体験学習を通して、現地の様子や日本との関わり、自分の進路などについて考える機会とします。中学部宿泊体験学習では、マンダレーやバガン王朝の遺跡やパゴダを見学したり、JICA の協力でバガン近郊の農園での体験学習をしました。小学部5、6年生の宿泊体験学習では、現地の子どもたちと交流のほか、アサヒ飲料関連のジュース工場の見学や国立文化芸術大学での人形劇体験、伝統の陶器工房での製作体験を行いました。また、現地理解学習として、低学年の生活科では学校スタッフ（ミャンマー人）とチンロン遊びを行い、3年生の社会科では、学校のまわりの地図づくり、4年生の社会科ではショッピングモール見学などを実施しています。（常に治安面を考慮に入れて、実施の有無を決定しています。）



3、現地理教育の推進（担任として、研修部長として、教務主任として）

国際化の進展がめざましい今日、政治・経済・文化など様々な分野において、国と国との交流や依存関係・互恵関係はこれまで以上に深まっています。こうした社会情勢の中、他国とより良い関係を築き、共存繁栄していくことは、日本人として必要かつ重要な意味を持つと考えています。

ヤンゴン日本人学校に通う児童・生徒は、まさに、こうした国と国との間に生活をする子どもたちである。日本とミャンマーを初めとする諸外国の言語、文化、習慣、自然・環境などの違いを肌で感じながら、明るくたくましく生活しています。だからこそ、自分たちが生活している「ヤンゴン」という地域、広くは「ミャンマー」という国のことについて、児童・生徒がより広く、より深く学び、日本を初めとする他国・他地域との違いに気づいたり、自分の考えを深めたりすることが重要なのです。このような活動を通して、問題解決的な学習能力ばかりでなく「自国の伝統や文化への尊重」や「他国の伝統や文化への尊重」につながるとともに、「共に生きていこう」という実践力につながるのではないかと考えて『現地理教育』を進めました。

派遣初年度は、6年担任並びに研修部長。2年目3年目と教務主任を拝命しました。その中で特に時間をかけ取り組んだのが以下です。

①言語の学習による異文化理解の取り組み「ミャンマー語（ビルマ語教育）」

ミャンマー語初級・中級・上級と日本語クラスに分かれて年間22時間程度行っています。この学習の目的は、ミャンマー語会話を学習することにより、現地に対する理解を深め、学んだ言語を用いて現地の方と交流を図ろうとする態度を養い、国際人としての資質の向上を図ることです。平成26年度は、以前と同様にミャンマー人講師9名に来ていただき、それぞれのクラスの児童生徒の実態と講師の個性に応じて、日常会話、ミャンマーの伝統的なお祭りなどミャンマー語と絡めた授業でした。しかし、このような形態では、講師の力量によって差が生じてしまうという実態と弊害が出てしまったため、平成27年度は、ミャンマー人講師などに協力していただき、「上級」「中級」「初級」の教科書を作成しました。ここでは、言語能力の獲得の過程、「聞くこと」～「話すこと」～「読めること（書けること）」に留意しました。まず聞くことができるようになって（意味も分かって）、話せるようになり、話したら、文字を読めるようになって、書いてみようとなるわけです。しかし、子どもたち一人ひとりの必要感の希薄さや楽しみながら学ぶと言うよりも「暗記」への傾向が強くなったこと、学年の発達段階への配慮が欠けていたため、思うような成果が出ませんでした。そのため、平成28年度は、その反省を生かし、新たに、「各学年ごと授業を行うこと」、それにともない学年ごとの発達段階や言語の習得の状況をふまえた指導計画を作成し学習を進める事としました。ただし、前年度使用した教科書についても使用できる部分を洗い出し、使用することとし、ミャンマー



H28年度 ミャンマー語 年間指導計画(上級)

赤…テキストにない項目 青…テキストには関連項目などがあるが、補助教材をつくる必要のあるもの

学年・月	4月・5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2・3月	年間総時数
小1											
小2											
小3											
小4											
小5	①挨拶・自己紹介 ②ミャンマーの文字	③家族・身近な人について	④おもしろいおみ		①学習の意図 ②おもしろいおみ	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ	⑤おもしろいおみ	⑥おもしろいおみ	⑦おもしろいおみ	21
小6	①挨拶・自己紹介 ②ミャンマーの文字	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ		①学習の意図 ②おもしろいおみ	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ	⑤おもしろいおみ	⑥おもしろいおみ	⑦おもしろいおみ	21
中1	①挨拶・自己紹介 ②ミャンマーの文字	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ		①学習の意図 ②おもしろいおみ	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ	⑤おもしろいおみ	⑥おもしろいおみ	⑦おもしろいおみ	21
中2	①挨拶・自己紹介 ②ミャンマーの文字	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ		①学習の意図 ②おもしろいおみ	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ	⑤おもしろいおみ	⑥おもしろいおみ	⑦おもしろいおみ	21
中3	①挨拶・自己紹介 ②ミャンマーの文字	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ		①学習の意図 ②おもしろいおみ	③おもしろいおみ	④おもしろいおみ	⑤おもしろいおみ	⑥おもしろいおみ	⑦おもしろいおみ	21
学年総時数	4	2	2	0	3	2	2	2	1	2	20

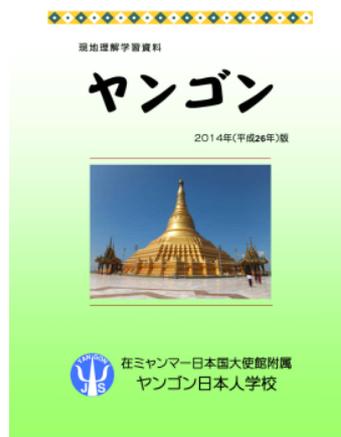
に留意しました。まず聞くことができるようになって（意味も分かって）、話せるようになり、話したら、文字を読めるようになって、書いてみようとなるわけです。しかし、子どもたち一人ひとりの必要感の希薄さや楽しみながら学ぶと言うよりも「暗記」への傾向が強くなったこと、学年の発達段階への配慮が欠けていたため、思うような成果が出ませんでした。そのため、平成28年度は、その反省を生かし、新たに、「各学年ごと授業を行うこと」、それにともない学年ごとの発達段階や言語の習得の状況をふまえた指導計画を作成し学習を進める事としました。ただし、前年度使用した教科書についても使用できる部分を洗い出し、使用することとし、ミャンマー

語初級・中級クラスでは、数字や時間など日常すぐにでも使うことのできる言葉を中心に学習し、上級クラスでは、文字を読んだり書いたりする学習計画をしました。この結果、暗記傾向にあった授業から改善させることができました。この授業の経験が、言語を学習するというばかりでなく、子どもたちにとって『異文化を知る』一つのきっかけになってくれること、継続した取り組みになってくれることを期待しています。

②校内研修による「現地理解教育」の推進

○現地理解教育資料『ヤンゴン』の活用

ヤンゴン日本人学校では、小学部3、4年生の社会科の副読本として現地理解教育資料『ヤンゴン』を教職員が編集し（平成26年度）刊行し、3、4年生の社会科で活用することはもちろん、他の学年でも活用し、現地理解につなげていく実践を行いました。これは、個人としても実践するばかりでなく、学校全体の取り組みとしても研修担当として推進することとしました。



(1) 全教科で『ヤンゴン』の利用可能箇所を指導計画に記載

2014年度版現地理解学習資料「ヤンゴン」は有用な資料であるにもかかわらず、3、4年生の社会科以外での以外の授業で活用していないこと。日本からの転入生の様子から、ミャンマーの生活、社会や文化に関する現地理解度はそれほど高くはないという状況があったこと。以上の理由から、「ヤンゴン」の各学年の授業での活用を図るばかりではなく、教科担任制を採用していることや派遣教員の異動により指導内容に継続性がないこともあり、指導計画に組み込み記載していくことにしました。

(2) 『資料ヤンゴン』を用いた授業の実践

校内研修会では、授業研究(一人一授業)をすることとしました。これにより教員全体で2014年度版現地理解学習資料「ヤンゴン」の授業での活用方法を進め、本校の教育カリキュラム(指導計画)の見直しや加筆などを行い、現地理解教育をさらに進めました。

(3) 『資料ヤンゴン』の修正・加筆」の準備

現地理解学習資料の再編集や地域素材の開発を含むこの資料は、「ヤンゴンの歴史や文化、自然や環境について、分かりやすい文章でまとめられており、かつ「写真や数字等によるデータが豊富に掲載されている」資料です。しかし、2014年度版「ヤンゴン」は現段階では、十分に完成された資料であることは間違いありませんが、進展めざましいミャンマーの最新の資料にするという意味では、「改訂」も視野に入れていく必要があります、『一授業』を行うにあたり教員一人ひとりに現地の情報を収集し、蓄積していただきました。

○小学部6年生の国語の実践から(光村図書)

(1) 単元名：町のよさを伝えるパンフレットを作ろう

<児童の作品より>

「紹介しよう ミャンマーのいいところ」

(2) 単元を貫く言語活動とその特徴

本単元を貫く言語活動として、「帰国した際、友達に、自分の住んでいた国や町のよさを伝えるためのパンフレットを作ること」とした。またパンフレットには、ヤンゴンで使用されている資料やインターネットに掲載されている写真や図などを有効に使い、対象のよさや特徴を読み手に紹介する目的で作った。

なぜ停電は起こるのか

皆さんは、なんで停電なんて起こるのかと思ったことはありませんか。さらに、なんで日本ではあまり停電が起らないのにヤンゴンでは多いのかとおもいませんか？ズバリ、その理由は発電所の送る電気の量が皆さんの使う電気の量より少ないからです。



詳しく説明すると、発電所がどんなに頑張っても一定量より多く発電できません。これは、バスタブが満タンの時に、水を足せないのと同じです。なので、皆さんが電気をたくさん使うと電気が足りなくなり、停電が起こるのです。

(3) 単元構成について

本単元では、自分たちの住む町や国のよさを他校の友達に伝えるパンフレットを作成することを通して、目的や意図に応じて書く事柄の収集・整理をする能力、複数の情報内容を編集して効果的に表現する能力の育成を図るばかりでなく、自分たちの住む、子どもたちにとってはあまり『便利ではない』『あまり良いところがない』とおもわれる町・国の良さ、問題点に気づきながらも、単元を通してどのように「よさ」を伝えるか考えながらパンフレット作りをさせていった。

これは、パンフレットづくりにとどまらなかった。上の発電所の写真は「ブルーチャン発電所」というミャンマーでも重要な発電所である。これを調べていく中で子どもたちは以下のような記述を見つける。

野生の象、虎、猿、鹿、蛇・・・
昭和29年11月のビルマ電力庁下命通知書交付を受け、12月8日、所長・木戸喜平が日本を発つ。18日には第1陣26名が2班に分かれて出発、翌年早々4名が渡航した。
大蛇、象、虎が出没する。朝は野猿が叫び、夜は鹿の声が聞こえる。密林を切り拓かねば道も資材置き場も現場事務所もできない。
近くに潜む反政府軍が作業員に紛れ込む可能性もあり、火薬は日本人が取り扱うように政府から言われる。
～鹿島建設 ホームページより～

「ブルーチャン発電所」は、日本の戦後補償の中で『鹿島建設』によって大変な労力のもとに建設されたものであることを知る。



・どうして、つくられたの？
(新たな問の創出・日本との関係)



こんなに大切に長期間使っているなんてすごい

子どもたちにとって、停電が起こるといふ日常の不便な状況。この状況だけでは、決して「よさ」にはつながっていきません。しかし、この原因を探っていく中で日本との関係を知るばかりでなく、60年以上も大切に使ってくれているという「よさ」に目がむいていったのです。

○宿泊体験学習の活動の実践から(小学部5、6年)

日本国内では5学年では宿泊体験学習、6年生では修学旅行が実施されている。いずれも、事前準備活動や当日の活動を通して、集団の中で協調して行動させたり、自分の役割に責任をもたせたりして、協調性や自主性を育むことを目的として行われる行事である。ヤンゴン日本人学校では、この宿泊体験学習を5、6年生合同で行い、先述の内容に加え、特にミャンマーの伝統文化、生活習慣に触れることで、現地理解を深める活動にも取り組んでいます。

(1) 見通しをもった計画

6年生担任となると、**年度当初より計画**に入ることになります。ミャンマーにおける伝統文化と言っても様々だからです。多種多様なものから、**ミャンマー人のスタッフからアドバイス**をもらったり、**自分自身で体験**してみたりしながら、児童の関心意欲の実態に即したもの、安全が確保されるもの、今まで児童が取り組んだことのないものなどを考慮しながら選定することとなります。

私が担任だった時には、「宝石絵」と呼ばれる伝統工芸品を選定した。宝石絵(画)とは、文字通り宝石で描いた絵画のことです。数十種類の貴重な天然宝石を下絵に沿って、熟練した職人が砕かれた宝石を輝きや色彩を考えながら一つ一つ手作りで貼り付けた工芸品であり、絵画としての立体的の価値と使用された宝石による収蔵価値があるとされています。使われる宝石は天然宝石の種類”アメジスト(紫水晶)、アベンチュリン(東陵石)、カーネリアン(紅瑪瑙)、レッドジャスパー(紅碧玉)、ローズクォーツ(芙蓉石)、砂金石(沙金石)、トルコ石(緑松石)、アイオライト(堇青石)、等です。



ミャンマーでは、宝石の産出量が多く、特にルビーは世界の産出量の10%、翡翠、サファイヤに限っては15世紀以前からサファイアの採掘（ミャンマーのモゴック地方）が有名です。その、際にとれた小さいものや加工する中で小さくなったものを宝石絵に用いています。

※天然資源に恵まれた国であることへの理解

(2)ミャンマーの生活に根ざした文化に触れる

さて、生活習慣に触れる・・・ここでは、生活の中での問題を考えてもらうことを目的として「孤児院」（ポンジーチャウン）で、同世代の子どもたちと交流をすることにしました。理由は3点です。



まず1つは、経済発展が進むこのミャンマーでも、貧困、両親の死亡などの理由により身寄りのない孤児が増えていることを知る。次に、その孤児の大きな受け皿となっているのが寺であり、仏教の教えによって孤児たちの生活が守られてばかりでなく、一生懸命に生活している現地の同年代の子どもたちの様子を実感すること。そして最後に、言語の時間に学んだ言葉を用いながら、何かを「上からの目線で施す」というのではなく、同じ目線にたって交流ができることによって、国際的な貢献とは何かということを考えるきっかけとすることです。

交流では、「日本の遊びを一緒にしよう」ということで、ふくわらい、こままわし、剣玉をおこないました。普段習っている、現地の言葉を試行錯誤駆使しながら、遊び方を説明し、実際にやってみせて教えてあげました。最初は戸惑っていた子どもたちですが、遊びを通して、盛り上がることができました。特にこままわしでは、ミャンマーにもひもの巻き方や投げ方が少し異なりますが「こま」があるので、現地の子どもたちの方が日本人学校の子どもたちよりもはるかに上手でしたので、逆にミャンマーの回し方を教えてもらいながらこまを回すという場面も見られました。

4、現地理解教育の推進から見えてきたもの

日本人学校（在外教育施設）の目的は、在外施設というメリットを十分に生かしながら、学校教育法に定められた教育及び学習指導要領に定められた学習内容を日本と同等以上に行うことです。

では日本人学校のメリットとはなにか？

それは児童生徒がミャンマーという外国に居住し生活をしているということに他ならない。

現在、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化し、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できない状況になっている中、学校教育としてグローバル化にともなう人材の育成が求められています。その現状の中で「在留国の特性」や「在留国の視点で考察する」などの現地理解ができ、日本国内だけでなく、「在留国を通じた世界像」（視点）を描かせることで、国際化に対応できる人材を育成できることこそ、最大のメリットあると考えています。

ミャンマーは2011年3月に文民政権が発足し、民政移管が実現した。先の政府は民主化を推進するとともに、経済改革等の取組を断行しています。そして、2015年11月8日に行われたミャンマー総選挙により、アウンサンスーチー国家最高顧問が率いるNLD（国民民主連盟）に政権交代が行われました。今後、さらに一層、経済発展が見込まれるなど、ミャンマーは大きな可能性のある国家となっています。

しかしながら、日本や他の先進国と呼ばれる国々と比較すると、まだかなり立ち後れているのが現状です。したがってこのような生活環境下でのヤンゴン日本人学校の児童生徒は、毎日起こる停電などに不便さを感じながらもそのことを当たり前と捉えている生徒がほとんどです。ミャンマーを「遅れた国」「支援をうけて当然の国」などのマイナスの視点にならない、つまり、「やはり日

本は良い」「日本が一番」というような、内向きな視点ではなく、日本人として、ミャンマーの良さを知り、そしてどうミャンマーに（世界に）関わっていくと良いのかというどう関わっていくかという考えを持つ外向きの視点。学習したことをきっかけとして、現地の人と交流しながら自ら主体的に関わりながら『共存』の視点を持つ事のできる資質（『メイド・ウィズ・ジャパン』『ともに寄り添う』）という意識が大切だと考えています。

まだまだ発展が途上中の国にて、国際理解をすすめる上で重要なことを端的にまとめるならば以下の2点なのではないかと考えています。

I、内向きな思考から外向きな思考へ II、児童生徒の持続可能な取り組み

以上のことは、日本人学校の子どもたちだけに当てはまるものではないと思っています。日本国内に於いても、発展途上にある国々に対して、「遅れた国」「支援をうけて当然の国」などのマイナスの視点にならず、「どのように自分が関わっていけるか」という意識を持てる子どもたちを育てることが重要なことだと考えます。

5、ミャンマーの暮らしから（終わりに）

○3年間で身につけた意識の変化。

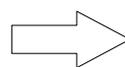
- ①ミャンマーという国にお世話になって、生活ができているという意識。
- ②人を大切にするという意識。（人種民族職業など関係なく）
- ③できるだけ機会をつくって、現地のなかに入ること。

この意識が無ければ、自分自身の中ばかりでなく、児童生徒にも「日本が一番」という意識に陥ってしまい、また現地の人々などにも、「日本人」として認められていかないのではないかと思うようになりました。

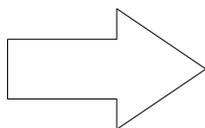
○ミャンマーの独特な宗教的感覚を理解することがミャンマーを理解することに結びつく。

出家して厳しい修行を積んだ僧侶だけがさとりを開き救われます。したがって、修行をしたわずかな人が救われ、一般の人々は救われません

『自力作善』



功德



道ばたの生ゴミも犬の食料。人間の余った食料を他の動物に分け与える功德であるということ。このことによって、野良犬の増加(狂犬病の蔓延)につながったり、悪臭の原因になったりする場合があります。これも一種の宗教観です。

以下の写真もその考えの一部かもしれません。ミャンマーでは、道ばたに歩きながらものを捨てること、自分の家の近くにゴミを放置するそんな光景がよく見られます。



<ゴミを捨てる>



<清掃する人 雇用の創出>

ゴミを捨てることで、「ゴミを集める」「ゴミをきれいにする」という新たな雇用を生み出し、その人がその報酬を受ける。なかなか理解できないのですが、「喜捨」と考えることもミャンマーの方の意識の中にあるようです。



左の2枚の写真は、ミャンマーの総選挙の時の写真です。この選挙で選挙管理を任されていたのは、公立学校の先生方でした。先生方は、公平に選挙を進めてくれる存在

として、選挙を支えました。これは、人々から教員として敬われていることの表れです。実際に先生たちも誇りを持って、この選挙の仕事をされていたとの報道がありました。仏教の教えには「仏法僧」というのがあります。これも、一種の宗教観が表れているものでしょう。<教職に就くものは敬われ、公平性の象徴>



日曜日になると、パゴダ(仏塔)に出かけ、お祈りをします。熱心に何度も何度も、お経を唱えながら、家族の幸福、自分の幸福、その他の人々の幸福を祈ると言われています。日常生活に宗教が密接に関わっています。

